

五山文学と道教(上)

——道教詩の味読——

Gosanbungaku and Taoism (1)

蔭 木 英 雄

はじめに

道教の定義は困難で、未だ確定しておらず、門外漢の筆者は戸惑うばかりである。しかし、迷ってばかりでは論が進まぬので、道教とは、中国の雑多な民間信仰を基盤とした土着的、伝統的な宗教であり、その要素として、

(1) 老荘思想を中心とし、儒教・仏教・識緯説・陰陽説を取り入れた哲学。

(2) 教団組織をもち、老子を神格化して、長生不死を求める教え。

(3) 本草・鍊丹・辟穀・調息などの原始医薬術と、符呪・坐祝などの教術。
がある教え。

として、本稿を進めることにする。

五山文学唯一の准勅撰集と言い得る『翰林五鳳集』は、卷一春部「江春入旧年」から、卷六十四祝讚部「天顔有喜」までの目録があつて、五山文学を通観するのに便利である⁽²⁾。その中から道教に関する題を拾ってみると、春宵宮宴玉母図(卷一春)、読荘子秋水篇(卷十七秋)、贊安期生(卷五十八支那人名)など百二十余首を数えることが出来る⁽³⁾。その作者を多い順にならべると、

天隠龍沢15、策彦周良10、月舟壽桂9、江西龍派8、瑞岩龍惺8 (数字は収載作品数)

など、五山文学史上第四期に属する人が大部分で、作風もこの時期の特色をよく表している⁽⁴⁾。内容は、老荘思想を深めたり、道教信仰に共鳴したりするものは少なく、神仙への憧憬、神仙画への感情移入、超俗希求の情趣的な詩偈が大部分である。これらを読

む限りでは、中村璋八氏の、

鎌倉・室町期においても、日中の交流は、求法の僧侶達及び西国豪族・大名・幕府によってなされていた。しかし、彼等が道教を請来したという事実は認め難い。⁽⁵⁾

という説は首肯出来る。芳賀幸四郎氏も、

総じて狭義の道教は、禅僧社会に殆んどいうに足りるほどの影響を与えなかった、と結論して敢えて大過ないであろう。

と中村氏と同趣旨の説を述べ、さらに、

しかしこれに反して、神仙思想は詩的ファンタジーと結んで相当に行われ、彼等の思想や文学に微妙な陰翳をなげたもの⁽⁶⁾のようである。

と推論しておられる。

なによりも、惟高妙安(一四八〇〜一五六七)という五山文学僧自身、『玉塵抄』で、

老子経ヲ青牛ノ書ト云タゾ。青牛不度大洋海ト宋景濂ヤラ作タゾ。日本エハ道士ノ教、老子ノ法ガコソゾ。大洋海ハ東大洋ト云ハ日本ノ⁽⁷⁾ゾ。

と、道教は日本へ渡って来なかったと述べている。

ところが、西胤俊承(一二三五〜一四二二)の詩集『真愚稿』に、「贈辟穀僧」という題の、次の如き七絶が見出されるのである。

自道能伝辟穀方 禅容如雪髮如霜 山禽慣識厨烟冷 求食朝

来過別牆

貴僧はご自分で「私はよく辟穀の方を伝えている」とおっしゃる。禅定の姿は雪のように清潔で髪も真白 山の小鳥は厨房が炊煙を上げず冷やかなのをよく知っていて 朝、食を求めて飛んで来てもすぐ別の家へ去っていく

人間は穀物をたべると、体に滓がたまり重くなって短命となる。ゆえに安期生は棗⁽⁸⁾をたべて断穀清腸を保った。辟穀僧とは、道教の長生術を實踐している禅僧であろう。転句の山禽も連想をたくましくすれば、「華佗の五禽戯」が浮んできて面白い。ともあれ、西胤俊承の交際範囲に辟穀僧が存在しているのである。

本稿では芳賀・中村両氏の説を検証すべく、道教、特に道観や道士に直接接触した禅僧の作品に、解釈学的研究を試みたい。まず、取りあげる禅僧を次頁に年令順に一覧表にしておく。

本稿の副題に「道教詩の味読」としたので、解釈上の誤謬もじっくり批正して頂きたい。従来の日本漢文学研究は、この方面の論義が少なく、断章取義の論放が多いので――。

○中国僧 ●来日僧 △日本五山僧 ▲渡航した五山僧

僧名	生年	渡航年	来日 帰朝年	没年	作品
○真浄克文	一〇二五			一一〇二	① ②
○無準師範	一一七八			一二四九	③ ④
○虚堂智愚	一一八五			一二六九	⑤ ⑥
●大休正念	一二一五		一二六九	一二八九	⑨ ⑩
●無学祖元	一二二六		一二八〇	一二八六	⑪ ⑫
●一山一寧	一二四七		一二九九	一三一七	⑬ ⑭
○月江正印	?			?	⑦
●明極楚俊	一二六二		一三二九	一三三六	⑮ ⑯ ⑰
○中峰明本	一二六三			一三三三	⑧
△天岸恵広	一二七三	一三二〇	一三二九	一三三五	
●清拙正澄	一二七四		一三二六	一三三九	⑱
△虎関師鍊	一二七八			一三四六	
△雪村友梅	一二九〇	一三〇七	一三二九	一三四六	
●竺仙梵僊	一二九二		一三二九	一三四八	
△别源円旨	一二九四	一三二〇	一三三〇	一三六四	
△中巖円月	一三〇〇	一三二五	一三三二	一三七五	
△義堂周信	一三二五			一三八八	
△絶海中津	一三三六	一三六八	一三七六	一四〇五	
△西胤俊承	一三五八			一四二二	

(一) 中国僧

真浄克文は、次の無準師範と一世紀余も離れているのだが、日本禅僧に大きな影響を与えているので、まず取り上げる。

① 与道士話長生

悠々人共老 誰復解追尋 豈信長生道 分明不滅心 魂飛宝
闕遠 夢役海山深 語此迷方者 無勞競寸陰

道士と長生を話す

はるか大昔から人間はみな年をとり 誰が昔を尋ねる術など理解出来ようぞ 不老長生の道術など信じられず 不生不滅の仏性の存在は明白なのじゃ (道士のあなたは) 魂は遠くの美しい門に飛び去り 夢に深山や大海を自在にするという 此の迷誤の方術を語る者は (長生を信じるのだから) 寸陰を競うような徒勞はせぬであらう。

真浄克文は道士に対して、きっぱりと長生術不信を明言し、『不生不滅、不垢不浄』(『般若心経』)の諸法空相の真実を贅えるのである。

② 書道士壁

仙学迷多説 当依柱史評 無心帰大道 有徳失長生 物我同
真宰 親疎豈可名 良哉衆妙本 一々有志情

道士の壁に書す

仙道には学説が多くて人を迷わすが 当然『老子』の言葉に依るべきじゃ 結局、無心は大道に帰着し 徳が有ると長生きにも失敗す

る 物と我とは、どちらとも造物者が作ったもので 親近とか疎遠とかレットルを貼って区別してはならぬ ああすばらしい、衆生は本来玄妙なもので それぞれにココロがあるのじゃ

ここでも①と同様、長生の道術を否定し、儒教をも批判する。少し②の詩句を穿鑿してみよう。

第三句の大道は、『孟子』の『立天下之正位、行天下之大道』（滕文篇）の儒教の大道ではなく、『老子』の、『大道汎兮其可左右万物恃之以生而不辞』へ大道は左にも右にも広くあふれる事が出来、固定的ではない。万物も大道のお蔭によって生じ自然のままであるや『莊子』の、『大道不称』（斉物篇）の大道であろう。従って第三句の無心も、『莊子』の『無心而不可与謀』（知北遊篇）であって、それは『碧巖録』八十則の、

為無心故、所以長養万物、亦不道我有許多功行。天地為無心故、所以長久。

の禪の無心に通ずるのである。

第五句の物我・真宰も、ふつう『莊子』の語と解されているが、『此子会尽物我一如』（『碧巖録』九十六則）『三界万壺十方真宰を拝す』（『正法眼蔵』洗面）などのように、禪籍にも用いられている。

第六句の親疎・名についてもコメントしておこう。『老子』の『天道無親』は、親は勿論のこと疎も無いのである。老子は『礼記』の、『夫礼者所以定親疎』（曲礼）という儒教的礼を認めず、『碧巖録』九十五則は、『無親疎処、分箇親疎』と、老子的親疎を否

定した上で、あらためて親疎を肯定している。この点が老荘思想と禪と微妙に異なる処であるが、真浄克文は相異点よりも、共通点を前面に表して詠っているのである。

孔子は子路に、「政治家として何から着手するのか」と質ねられた時、『必也正名乎』（『論語』子路篇）と答えた。この文に朱子は、『孔子以正名為先』と注している。つまり、儒教政治の第一歩は名を正す事であった。これに対し、『老子』は、『繩々不可名』と名を否定したところに大道を見、『碧巖録』二十一則も、

本無得失夢幻如許多名目、不可強与他安立名字。へ一切法は、本来夢まぼろしのような得失とか、多くの仮の名前などは無い。むりに万物に名をつけて区別せずともよい

と、名をつけて区別する事を超越せよ——と教える。

真浄克文より少し先輩の明教契嵩（一〇〇七—一〇七二）は『輔教篇』を著わして儒仏道の三教一致論を説いたが、①②を読む限りでは、真浄克文は儒教を批判し、道士に対して不老長生の道術を戒め、老子（柱史）に依拠すべきことを教え、最終的には禪に向かうことを勧めるのだった。

老君皇帝として有名な、宋の徽宗の在位期間（一一〇〇—一一二五）の前半は、真浄克文の晩年と重なる。徽宗は広く天下に詔して道教経典を求め、道士たちに校訂させて、五三七八巻の道蔵を編纂させている。そういう時代を、真浄克文は背負っていたのだ。

〔ぶしんしはん〕
無準師範は、五山文学の祖たる無字祖元や、東福寺開山聖一
国師の師で、わが五山文学に大きな影響を持つ中国僧である。彼
が道士に与えた二首を読む。

③ 元道士

黄衣捨了混緇衣 棄却甜桃摘醋梨 酸渋一時嘗過了 攢眉帰
去許誰知

道士の黄衣を脱ぎ捨てて黒衣の僧にまじり 甘い桃を棄てて醋っぱ
い梨を摘んでいる 渋く酸い実をちよつと嘗めてから 眉をしかめ
て去ろうとしても誰が許してくれるものか

雄 承句の甜桃が、西王母の仙桃即ち神仙道を象徴している事は解る
英 が、醋梨は何を喩えているのだろう。起句から推測すると、敵し
木 い禅をさしているようでもある。すると、禅をちよつと啗っただ
藤 けで、修行から逃げ出すのを諷めているものと解せる。

結句は、「遠師勉令陶淵明入蓮社、淵明攢眉而去」（『廬山記』）に
拠っている。慧遠は陶淵明を白蓮社（仏教結社）に入れようと勉
めたが、淵明は顔をしかめて帰ったという故事である。無準師範
は元道士を陶淵明に擬えて宥めているのだが、禅林に入った道
士が存在した事がわかる。

④ 浄道士

伊予頭脳不相似 鼻孔由来只一般 冷地白家親模者 老君元
戴楮皮冠

道士の伊と禪者の子とは脳味噌はちがうが 鼻の穴（本来の面目）
はもともとおなじじゃ ひっそりと貧乏小屋でさぐってみると 老
君は元来、頭に紙の冠をかぶっておるわい

『碧巖録』三十二則に、「未だ鼻孔を失却することを免れず」と
ある鼻孔は、富とか地位など一切の飾りのない、人間本来の面目
をいう。無準師範は、老子を神格化した老君に異質感を抱いたの
か、それとも、貧しい紙冠など捨て去って、仏法に帰依して本来
の面目を明らかにする（見性）ことを勧めているのか。いずれにしろ、
道士に対し禅道優位の立場で詠っている。

虚堂智愚の法嗣が大応国師南浦紹明であり、南浦の法系から大
徳寺開山大灯国師、妙心寺開山関山慧玄、そして虚堂再来を自認
した一休宗純などが出ているのである。

⑤ 老子曰、視之不見名曰夷。聴之不聞名曰希。博之不得

名曰微。此三者不可致詰。

青牛仙去不虛伝 常用虚中落断辺 自是一生多蹇薄 夜深猶
立古皇前

老子が言った。「道は見ようとしても見えないので夷と名づける。
聞こえぬから希と言う。捉えようとしても取られぬの
で微と命名する。しかし、夷希微の三つでも、やはり道の本体を
極め尽くすことは出来ぬ」と。

老子が青牛に乗って西域に去ったというのは嘘ではないのだ ipp
も虚無の心で脱路截断する わし自身は一生愚かで 夜ふけになっ

てもしつと古皇の前に立ち尽すばかりじゃ

難解な偈である。『高士伝』に拠ると、老子は青牛に乗って西域に入ったと記し、『老子化胡経』（『日本見在書目録』にある）では、老子は西域の胡人を仏法で教化し、中華に帰って孔子を教え、やがて西那玉界蘇隣国王の家に生まれて、末摩尼という仏になったという。そういう老子を、虚堂は肯定しているのかどうか。それこそ道を体得せぬ筆者には解明出来ない。結句で、『深夜に上古の帝有巢氏の前にしつと立つ』というのは、自己や人類の原点に立ちかえる、つまり、『父母未生以前の本来の自己』を観照することなのだろう。『老子』第十四章の前半を題にして偈を作ったという事は、大いに注目してよい。

⑥ 遊金華洞山

颺々崖溜静辺聞 到此仙凡咫尺分 鶴賀朝真何日返 洞門終

日鎖寒雲

シユウシユウと崖から落ちる水音が、静まりかえった辺りに聞こえる。此処に來ると仙界と俗界とが隣り合せだ。鶴は朝真の道士を祝いに行つていつ返つて來ることやら——洞門は終日冷たい雲にとざされてゐる。

赤松子が神仙道を会得したという金華洞は、浙江省金華県の北部にあり、虚堂智愚はそこを訪れたのであった。転句の朝真は、仏徒の坐禅の如きもので、黄録齋という道士の潔齋の儀式の一である。彼はこういう儀式を知悉していたのだった。結句の鎖の一字

が、禪と神仙とを明確に隔絶させている。

月江正印は⑮⑯の清拙正澄の俗兄で、後述の明極楚俊と共に虎巖淨伏の法を嗣いだ。彼の鉗鎚を受けた日本留学僧は、此山妙在をはじめ性海靈見、鉄舟徳濟、友山士徳、古先印元、中巖円月、不聞契聞など多士濟々である。

⑦ 遊張公洞、用天師韻贈陳景山

谿窈古洞天風涼 錦屏玉節搖金光 千光靈官咲迎客 銀髯丹
臉脩眉蒼 扳危歷覽忘初歩 仙翁飲我瓊花露 一声何処鳳凰
鳴 玉童遙指烟霞路

張公洞に出かけ、天師の韻で詩を作り陳景山に贈る。がらんとして深い張公洞は風が涼しく、洞内の錦の屏風や玉の符節はキラキラ輝いている（崖の紅葉や蓮が陽光の中にゆらいている）千年の伝統を持つ靈官（山門を鎮護する王靈官の塑像）が客の拙儀を歓迎し、銀の顎ひげ、赤ら顔、そして長い眉をたらしめている。峻崖をよじ登り眺め渡していると歩くのも忘れ、仙人の老翁が私に瓊花の露を飲ませた。どこかで鳳凰が一声鳴き、童児が遙か彼方の霞のかかる山路を指してくれた。

張公洞は江蘇省宜興県の東南にあり、五斗米道の開祖張陵の居所である。天師は道士最高の地位であり、月江正印と詩を応酬したのであろう。

頷聯の靈官は天師の下にいる道官名だが、ここは道観（道教寺院）にある塑像王靈官と思われる。寺門に立つ仁王像の如きこの

山門守護神は、赤顔に三つ目で武装している。

頽聯の瓊花は『大漢和辞典』を引くと、(紫陽花に似た世に稀な花で、旧揚州城外の道観の瓊花観に咲いていた)とある。月江禪師は、仏教に於ける「甘露」の如きものを饗応されたのであろうか。

月江正印の道観は⑦のみでは分からない。しかし、禅匠が道観を訪れて、天師と詩を贈答している事実は注目に値する。

中峰明本は幻住派の祖で、法嗣の日本僧は無隠元晦、古先印元、復庵宗己、遠溪祖雄等があり、参禅した日本留学僧は寂室元光、孤峰覚明、別源円旨など、渡航した日本僧の殆どが、中峰の道名を慕って参禅したのである。

⑧ 贈道士張友梅

参禅不解救頭然 蹉過工夫万々千 猫捕鼠非真譬喻 人騎牛
是錯流伝 四溟絶滴猶存海 万里無雲尚有天 当念一斉翻得
転 頭々是出世間縁

参禅しても頭上の火を消す如き弁道専一を解さず まちがった工夫を万々千も重ねている 猫が鼠を捕えるというのは得悟の真の比喻にはならず 「十牛図」の騎牛も錯まった言い伝えた 四方の海に一滴の水が無くても海は存在し 万里に一点の雲がなくても大空はあるのだ 思考をバツと転換することが出来たら どれもそれぞれ出世間の機縁となる

首聯は道士の錯まった参禅工夫に、鉄鎚をくだしているのである

う。③と同様、禅林に近づく道士の存在を知り得る。

「十牛図」の第六騎、牛、帰家は、牛と人とが一しよに家(本来の面目)に帰る図である。それをしも中峰明本が「錯まりじゃ」と決めつけるのは、百尺竿頭一步を進める事(一斉翻得)を教えているのである。

頽聯は海と天を教材にして、言語的分別的概念の底を打ち抜く事を教えている。換言すれば、無即有、いや有無を超えた境地を、海天に託して詠っているのである。翻転(百尺竿頭一步進前)して否定を越えると「頭々、是道、物々全真」(『碧巖録』二則)となるのである。

世祖フビライは至元十三年(一二七六)、正一天師張宗演を召見し、至元廿九年(一二九二)、第三十七代天師張与棣を召すなど、道教々団を厚く保護した。又、文宗は致和二年(一二三九)に、全真教道士の苗道一に、都で醮を行なわせるなど、中峰明本たちの時代、道教はなかなか盛んだったのである。

- 以上、五山文学に影響を与えた中国禅僧の八首を読むと、
- (1)老子(老君ではない)は尊崇しているが、
 - (2)道士の神仙術、長生術は批判している。
 - (3)禅僧も道観を訪れて、道士と詩作し、
 - (4)道士も参禅しているが、
 - (5)禅旨を厳しく教えている。
- ことがわかる。

(二) 来日僧

大休正念は、「皆（ハ）志も詩も吾が方寸中より流出し、剩法に非ざるのみ」（題水墨梅花枕屏後板）と述べて、五山草創期の日本文学僧に大なる影響を与え、「為武蔵守殿供養儒、釈道、三教、陞座」という法語に三教一致論を展開し、「三教図」三首の偈を作っている。そのうちの一首を読んでみる。

⑨ 三教図

文行忠信 常楽我浄 清虚無為 各正性命 三足鼎分兮乾坤泰定

孔子は文（詩書礼楽）、行（実践）、忠（まごころ）、信実の四つを教え 釈迦牟尼は一切の無常・苦・執着・不浄の四つを離れることを唱え 老子は清静と無為自然を説いた 三人はそれぞれ万物の有する性質を正したのであり 鼎の足の如き三教によって、天地は安定するのだ

『論語』の、『子以四教文、行、忠、信』（述而篇）、『法華玄義』の、『常楽我浄、名為仏性顕』、『老子』の、『致虚極、守静篤』、『為無為、則無不治』によって、儒仏道の思想をはじめの三句で端的に述べ、『易』の、『乾道變化各正其性命』、『莊子』の、『彼至正者不失其性命之情』（駢拇篇）、『宇泰定者発乎天光』（庚桑楚篇）の傍点の語を用いて、大休正念は三教一致を詠っている。ちなみに、建仁寺両足院

には伝如拙筆、正宗龍統賛の「三教図」、梅沢記念館には墨彩筆、野雲賛の「三教図」がある¹⁶。

道元禅師は『正法眼蔵』四禅比丘で、

正受・智円いまだ仏法の一隅をしらざるによりて、一鼎三足の邪計をなす。（中略）いま遶運の輩、宋朝愚暗の輩の三教一致の狂言、用ゐるべからず。

と、徹底的に三教一致を批判しているが、大休正念は積極的に肯定するのだった。

⑩

呂洞賓見黄龍問、一粒粟中蔵世界、二升鐘内煮山川、呂不契。夜間飛劍来、龍指之墜地。

任汝粟中蔵世界 那知鐘外有山川 劍鋒落地難尋覓 始覚従前悞学仙

呂洞賓が黄龍譚機に会って質問した。「一粒の粟の中に世界を包蔵し、二升入りの鍋の中で山川を煮沸する、とはどういう事ですか。」禅師が「守屍鬼」と答えたが呂洞賓は分からず、怒って夜中に剣を飛ばして禅師を襲った。しかし、黄龍禅師が指さすと剣は地に落下した。

呂洞賓よ、お前に「粟中に世界を蔵す」という公案を任せよう 「なべの外に山川がある」という自然法尔、事々無礙法界は解らん だろう 呂洞賓は自分の投げた剣は地に落ちてしまつて探し得ず そこでやっと神仙術を学んだ事の誤りをさとった

禅体験の乏しい筆者は、相当無理して口語に訳したが、『人天宝鑑』によると、呂洞賓は黄龍禅師の公案によって省悟し、

拗却瓢兒碎却琴 如今不恋水中金 自從一見黃龍後 始覺從前用心

の開悟の偈を呈したのだった。

大休正念も、『老子』の教説は尊崇するが、既述の五人の中国僧と同じく、道術を批判して禅の優位を詠うのだった。

無学祖元の法脈は、最大の夢窓派（嵯峨派）をはじめとして、日本中世禅林に栄えた。

我入院以来、諸人と頌子五六軸を改む。恐らく三四百箇有らん。（建長寺普説）

と、日本禅徒の偈頌を添削し、

頌をやるの法、亦た定式無し。且に理到り権実照用するを要す。（同右）

などと偈頌の作り方を懇切に教え、まさに五山文学の祖たるにふさわしい。道教に関する作品をあげてみる。

II 呂洞賓画像

万里乘空若断蓬 不知失脚到黄龍 一拳打断蓬萊路 日在吹毛映上紅

蓬のように矮小な執られた心を断ち切って、呂洞賓は万里の空を飛んでいたが、知らず識らずに足を踏みはずして黄龍山の誨機禅師の許に行った。拳で一打して蓬萊山への路（神仙道）を切断すると、日は黄龍禅師が指して墜ちた剣の上に赤々と輝いた。

⑩と同じテーマを詠っている。『莊子』逍遙遊篇は九万里を搏く大鵬の寓話から始まり、惠施と莊子の問答で終るが、莊子は、「夫子（惠施）には猶お蓬の心の有るよ」と、矮小な俗事に縛られる惠施を批判した。無学祖元はそれを呂洞賓に置きかえる。まことに無技巧の技巧の起句と言えよう。

『人天宝鑑』によれば、鍾離権から金丹術と天仙の劍法を授けられた呂洞賓は、まず龍牙和尚に仏法の大意を問い、次で黄龍山に登ったのであった。それを「失脚」と表現するのは無学和尚のアイロニーである。

起句の断蓬は惠施流の束縛執着から脱却することであったが、転句の断蓬萊は神仙道との絶縁を意味し、ここにもさりげない言語的技巧が見られる。

結句は、『莊子』則陽篇の、

吹劍首者呖而已矣。（偉大な超越者の前では、世俗的聖人の堯舜などは、劍首の小さい穴を吹くと出てくるスウーとい音のように、小人物です）

という文を連想させる。日は仏日（仏陀の智慧の光）であり、吹毛映から儒教聖人堯舜を読み取るのは、筆者の拡大解釈であろうか。

⑫ 鍾閻洞賓

握手蓬萊鳴外天 葫蘆傾出旧山川 不論劫石消磨事 応説蟠桃著子年

鍾離権と弟子の呂洞賓とは蓬萊島の彼方の空で握手し ひょうたんを傾けて（鑑で煮る前の）昔のままの山川（空間）を出す 一辺四十里の劫石が磨滅すること（仏教的時間）などは二人は議論せず 桃が実を結ぶ三千年の事（道教的時間）を話し合っているのだろうか

鍾と呂が握手する場所は、東海中の仙山と思いきや、はるか島外の天^{てん}というのに留意せねばならぬ。承句の葫蘆（ひょうたん）は、

問う、「如何なるか是れ祖師西來の意。」師云く、「東壁上に葫蘆を掛けてより多少の時ぞ」と。（趙州録）

とあるように、達磨が中国に来て伝えようとした精神を象徴する用具である。山川は⑩で読んだ山川であり、さらには、

問う、「如何なるか是れ西來の意。」師云く、「山河大地。」（雲門広録）

問う、「如何なるか是れ古仏の心。」師曰く、「山河大地。」（景德伝灯録）十三、吉州資福貞遂の項

の如く、山川山河は古仏の心を表象する。このように読んでくると、承句は、「大道は人間界を超越した神仙術にはなく、日常生活の中にある」という事を詠っているのである。

転句の劫石消磨については、『碧巖録』七十五則に、

雪竇道わく、「劫石固うし来るも、猶お壊すべし」と。石は堅固なりと雖も、尚お消磨し尽くすべし。此の二人（鳥丘和尚と問答相手）の機鋒、千古万古更に窮尽有ること無し。

という評唱がある。無学祖元は此の二人を、鍾離権と呂洞賓に置

き換えて、千万年経っても尽きぬ禅機を称えているのである。そして結句では、正統禅が的々相承して結実する事を願うのであった。

一山一寧は来日する以前、至正廿一年（二二八四）五月十八日、四明鰲峰山祖印禅寺に入院した。その時の法語の一部を読む。

⑬ 抛室。任公之釣、一掣六鰲。若是跛齠盲龜。縮頭去。

祖印寺方丈の曲縁に坐して、『列子』『莊子』によると、任公子は一本の釣糸で、六匹の海亀を釣ったというが、もし、足の悪い亀や眼の見えぬ亀ならどうじゃ。」叱声を張り上げて、「首を縮めて行ってしまうぞ。」と述べた。

一山一寧は道家の語から禅語を導入して、雲水接化の強い決意を披瀝している。

⑭ 老子

先天地而有生 極玄妙而莫伝 不遇得関尹喜 誰可授五千言
大道は天地に先だつて存在し 極めて奥深く微妙で伝えられない
老子が函谷関の尹喜に遇えなかつたら 誰に五千言の『道德経』を
伝授し得たであろうか

大道の師資相承の重要性を「玄之又玄、衆妙之門」¹⁷、有物混成、先天地生¹⁸、という『老子』の語を用いて吟じているのだが、無学祖元らの作品に比して、味気なく感じるのは筆者だけだろうか。

明極楚俊が後醍醐天皇に、「此の君亢龍の悔い有り」と雖も、二

度、帝位を踐ませ給べき御相有り」と、再祚の予言をした事は、『太平記』巻四で有名である。来日以前、道教寺院を訪れている。

15 冲寂観

義興冲寂観 著屋向瓊林 路接天申近 門通地肺通 兔升丹
井口 龍躍漏湖心 中有高人隱 玄談出古今

江蘇省宜興県の冲寂観は瓊花(7参照)の林の方に向いている路は近くの天申宮に続き 門は陶弘景が居た茅山に通じている 丹砂(仙薬の原料)の井戸に太陽が昇り 漏湖の真中を龍が躍るように舟が進んでいる 冲寂観の中には高士が隠棲し 古今に通ずる玄妙な真理を語ってくれる

雄 英 木 蔭
[7]で読んだ張公洞には、白銀色の天申宮や冲寂観が薨を並べ、近くに奇岩怪石が蹲り、遠くの茅山の嶺々や、沙子湖(漏湖)の濼波が眺望出来る。洞中に一步入れば、白髪のお道士が拜壇に額つき、童子が白で仙薬を撞いていた。16は二百十三字の長篇だが、十四世紀初頭の道教洞天を知るため、全篇を掲げる。

16 遊義興張公洞天

天申宮中偶為客 侶入瀛洲白銀宅 擣藥仙童語笑温 拜壇道士鬚髮白 呼童執燭指引遊洞天 迺知漢朝曾隱張公仙 張公鍊丹丹成化鶴上天去 至今靈蹤異跡顯著千余年 嗟驚此境界殊絶 磊砢嵌空乱積鉄 人形鬼形千万端 虎態龍態一一別 有如懸宝華 有如立幢塔 有如霓旌隊仗羅瑶台 壮士勇敵按金甲 吾想夫造化學開沌混始 是中瀆洞無塵滓 十日飛光六

合焦 五色石骨流出髓 胚輝凝結歲月深 怪々奇々有如此 初非矯揉穿鑿成 一出天真自然理 張公隱此誠奇哉 我今一見心亦開 不用九軫仙丹換凡骨 已知三韓之外無蓬萊

張公洞の天申宮にたまたま客となり 友と仙山の白銀の建物に入った 中で仙薬をついでいる童子が笑って語りかけ 拜壇の道士は頭も鬚も真白 童子を呼び燭台を持ち案内を請うて張公洞に遊ぶと後漢の張陵が此処に隠棲したのも当然だと知った 張陵は鍊丹に成功すると鶴になって天に上り 千余年後の今日まで靈跡がはつきり残っている この境界は果して素晴らしいのに驚嘆し 空にまで岩石がごろごろし鉄を積んでいる 人間や鬼の形などいろいろあり 虎や熊の恰好もしている 仏寺の宝華のような物 幢や塔を立てたような物 玉台の側の霓旌や隊仗のような物 それに金の甲を着た勇士の如き岩もある 拙僧は考えた「造物主が天地を開いて万物が混沌としている時 張公洞は雲が湧き汚塵が無く 十箇の太陽の光で天地四方が焼け 五色の石骨は髓を流した もやもやの気が固まってから歳月が流れ このような奇怪な岩石が生じたのだ」と 拙僧は今張公洞を一見して心も開け 九回煉った丹薬を用いずとも凡骨を仙骨に換えられた 蓬萊山は三韓の外に出るのでなく此処に現在するのだと知ったのである

私達も明極楚俊の五感を通して、かなり具体的に道観の様子を知ることが出来る。

17 崎翁員居士求語

仙中仙 聖中聖 何曾静入那伽定 吞霞服氣是妄心 吐納鍊形非正性 (中略) 爾今学仏不学仙 也知仙は無常鬼 日

裏看経達仏理 夜間打坐参祖意 忽朝豁見本来心 (後略)

仙人中の仙人や 聖人中の聖人は なぜ昔、禪定に入らなかつたの
 だらう 霞を吸い気を服用する道術は心を妄し 悪気を吐き形を鍊
 る道術では本来の性を正すことは出来ぬ(中略) 居士よ、あなたは
 今や仏法を学んで仙術を学ばず 仙術は無常の鬼である事を知つ
 た 日中は經典を誦して仏理に通達し 夜には坐禅して古仏の意に
 参入する いまに忽然と見性し本来の面目を見るだらう(後略)

察するに、崎翁員居士は初め神仙術を学んで、後に禅修行に入つたものと思われる。明極和尚が張天洞を訪れるなど、道教と禅との交流はかなり行われていたのだらう。

清拙正澄は光明天皇より大鑑禪師の号を追贈され、大鑑派は中世禅林で栄えた。¹⁸⁾

18) 吉洲道士蕭独清遊匡山求贈

時在東林

姑射神人冰雪姿 霞裾步月擎玉芝 乾坤清氣称独有 礪彼同
 学濁俗癡 匡廬山高太古色 長松片石皆華滋 古今賢愚共遊
 覽 真正面目識者誰 溪声広長之舌 蘇仙未及彷彿 銀河自
 天而落 李仙方且懷疑 其余碌々何足言之 神人神人急著草
 鞋 徧遶三万六千匝 雲羅繚曲洞谷欹危 凹々凸々七上八下
 莽々蕩々六方四維 天風作腥熊虎怒 山木変黒蛟龍移 左
 佩太極章 右佩昆吾鉄 穿崖度壁白日空飛 上天池下虎溪
 却問廬山面目 纔方摸得些皮

江西省吉安県の道士蕭独清が廬山に遊び、当時東林寺に居た私に詩を請うた。

氷雪のような肌の貌姑射の神人(蕭独清)は 霞衣の裾をひるが
 えして月光の中を歩き玉芝を捧げる 天地の清気を独占していると
 称し 彼の同学者の汚濁した愚者を礪いている 廬山は高く太古の
 ままの景色で 長松は茂り石は美しく 古人の賢人愚者が共に遊覽
 する しかし廬山の真の姿(本来真面目)を誰が識っておらうぞ

「溪声は仏陀の説法」と吟じた 蘇軾も廬山をありありと詠い得ず
 瀑布を「銀河九天より落つ」と形容した 李白も「疑うらくは是
 れ……」と疑問をさしはさみ この二人の他は碌でもないヤツで話
 にならぬ 神人の蕭独清よ! すぐ草鞋をはいて 廬山を隅々まで三
 万六千回遶るがよい(そして真面目を識るのだ) 雲の如き蘿が崖
 にまつわり洞谷は傾き 道は凸凹で上下して心も迷う 四方八方草
 木が茂っている 天風は腥く熊や虎が吼え 山木は黒くなって蛟
 龍も居なくなった 神人は左に太極章を帯び右に昆吾の鉄剣を佩び
 断崖を穿ち絶壁を渡って白日の天空を飛行する 上は天地峰下、
 は三笑で有名な虎溪まで—— そこで又「廬山の真面目は何か」と
 問うと やつと廬山の上つただけ描写出来るだけだ

道士蕭独清はどういう人物か不明だが、太一教を始めた同姓の蕭
 抱珍を想起させる。清拙正澄は、「予は錫を虎溪に寄せ三寒暑を
 同居す」(題廬山龍巖真首座寄師偈)と述べているので、¹⁹⁾はその頃
 の作品と思われる。中巖円月の至順元年(二三三〇)の『自歷語』
 には、「路を廬阜に借り、龍巖・柏壑二老を訪う」とあり、中国
 に渡航しない義堂周信も、「廬山に到らざれば是れ僧ならず」(瀑
 布)と吟じて、廬山は禅僧の聖地の如き処であった。それに、六

朝時代の呉邁遠の涉道詩（道教聖地の詩）を見ると、『廬山に遊び道士の石室を観る』の句があり、道観も多かつたらしく、浄明道の許真君（許遜）も廬山に居たのである。

清拙正澄は、「静寄法師許君六不壞二瑞讚」の叙文で、

〔9〕古雲間玉清仙觀の静寄法師は、道瑄にして心を吾が西竺大聖人の学に潜め、梵典を書きて広く施す。日に率ね千字、雜華三部、蓮経卒堵波二座、法華部四十有六、楞嚴・円覚諸經のごときは尤も多く持誦す。（後略）

と、道瑄（道士の位階）でありながら仏教に帰依する静寄法師の存在を記している。

竺仙梵僊は、五山文学に大きい影響を及ぼした金剛幢下直系の中国禅僧で、明極楚俊の侍者として来朝し、足利直義、大友貞宗の厚い外護を受けた。彼の『来々禅子集』（『大日本仏教全書』所収）に、「次韻寄昇元觀道士」があるが、これだけでは、彼の道教観は分からない。禅僧と道士の文学的交流が例外ではない事資料として読んでおく。

〔20〕 次韻寄昇元觀道士

曾訪仙家上石樓 繞樓山色翠凝眸 仙人騎鶴上天去 独倚闌干笑點頭

かつて仙家を訪れて石の樓閣に上ると 樓のまわりの山景色は緑滴り眸をこらして見たものだった 仙人は鶴に乗って天空に去り

の第七句参照）拙僧はただ一人欄干にもたれて笑つてうなづく

赤符玉札黄金印 雲篆天書白雪歌 不用靈丹駐顔色 乱松杉外月明多

道士は赤い呪符、玉の書札、金印を持ち 陶弘景の如き字の神人の書を捧持して難しい白雪歌をうたっている 靈薬を服用せずとも若々しい顔色で まばらな松や杉の彼方に月光が溢れている

洞府有門人罕到 涼風無意聖之清 碧海人騎紫雲至 笑語不知誰解聽

神仙の居る洞府に門は有るがめつたに人は来ず 涼風が無心に吹いて尊く清らかである 紺碧の海を紫雲に乗って仙人が来て 笑つて語るのを誰が理解して聴いているのやら――

次号では、日本五山僧の道教詩を読む。（未完）

注

- (1) 酒井忠夫・福井文雅「道教とは何か」（平河出版『道教1』所収）では、十三もの多くの道教定義を紹介する。
- (2) 拙稿「翰林五鳳集について」（相愛大学研究論集第4、5、6巻）参照。
- (3) この数字は詩題に依つたもの。他に「盆石」「題画」などにも、内容的には道教を詠する作品が多い。
- (4) 拙著『五山詩史の研究』三七七頁以下参照。
- (5) 中村璋八「日本の道教」（平河出版『道教3』）三四頁
- (6) 芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』（思文閣

出版) 二一四頁

(7) 中田祝夫編『玉塵抄』(2) (勉誠社) 四〇九頁。ただし、惟高の文章は日本へ道教不渡来を述べているのではなく、宋景濂の詩句の解釈であったかも知れぬ。

(8) 陶弘景『養性延命録』(『雲笈七籤』所収)

(9) 清拙正澄の俗兄である月江正印は、一二九五にはじめて碧雲寺住持となり、一三三三に阿育王山に住しているため、一二六〇頃に生れたと推測して位置つけた。

(10) 文閔西と称せられた真浄克文が五山文学僧に景仰されたことは、中敵円月の「建仁寺上堂法語」に、「独愛文閔西無頭腦、義堂周信の「範侍者」に、「每懷香林遠 更懷真浄克、彦龍周興の「景筠字説」に「於文閔西呻吟声歎、云々」とあるのはその一例である。

(11) 『莊子』齊物論篇に、「天地与我並生、万物与我為一」や「若有真宰而特不得其朕」とある。

(12) 恩師玉村竹二先生をはじめ、多くの先学は一山一寧を五山文学の祖としている。前掲拙著『五山詩史の研究』二七頁以下参照。

(13) 末松謙澄『文学上美術上三教思想研究』によると、三教一致の變形としての「東坡醋図」は「蘇東坡が黄山谷と連れだつて仏印禅師を訪れると、禅師が桃花醋を饗応し、あまりの酸味に三人とも顔をしかめた」というエピソードを主題にした絵だという。すると、醋は酸しい禅味と解せる。

(14) 野口善敬「天目中峰研究序説」(『中国哲学論集』四号)、西尾賢隆「元の幻住明本とその海東への波紋」(『日本歴史』四六一号) 参照。

(15) 醮とは、夜中に星晨の下で酒肉などの供物を並べて、天皇、太乙、五皇、列宿を祀り、願文を奏上して消災度厄を祈る法のこと。

(16) 二つの画は毎日新聞社刊『禅林画賛』に収載。

(17) 『碧巖録』十二則「跛、繁、盲、亀、入空谷」、『碧巖録』五十九則「咄、縮、頭、去」。

(18) 西尾賢隆「日元における清拙正澄の事蹟」(『日本歴史』四三〇号) 参照。

(19) 龍湫周沢の『随得集』にも、「相約高登最上層 巖前松竹是良朋 緬思一十八人社 不到廬山不是僧」(友峰)の作がある。